



京丹後市・白岩恒美農園のみなさん  
※クローズアップ この経営者！（2ページで紹介）

CONTENTS

クローズアップ この経営者！ …… 2ページ

丹後フルーツのギフト需要を開拓

— 自慢の梨を香港・シンガポール・台湾へ輸出 —  
白岩千尋さん・雅人さん（京丹後市）

チャレンジ農業法人 …… 4ページ

そば復活で地域を元気に

— 合言葉は「あなたも儲ける、私も儲ける」 —  
有限会社 やくの農業振興団（福知山市）

農地中間管理事業に330経営体が応募 … 6ページ

— 規模拡大めざす担い手から期待の声 —

スペシャリストの経営セミナー …… 7ページ

明日の農業経営のために備える

山脇康彦さん（中小企業診断士）

農業法人ニュース …… 8ページ

— 京都府農業法人経営者会議の取り組み —

■(株)六星、(株)ぶどうの木を視察

■ファーマーズ&キッズフェスタに出展

編集局から

クローズアップ

この経営者!

## 丹後フルーツの ギフト需要を開拓

—自慢の梨を香港・  
シンガポール・台湾へ輸出—



左から白岩千尋さん・恒美さん（父）・雅人さん

京丹後市 白岩恒美農園

白岩千尋<sup>ちひろ</sup>さん（34）・雅人<sup>まさと</sup>さん（31）

京丹後市久美浜町で果樹栽培に取り組む白岩千尋さん（34）・雅人さん（31）兄弟は、それぞれの得意分野を生かして販売と生産を分担。独自の肥培管理技術にこだわり、ギフト用フルーツにふさわしい品質を実現するとともに、安心・安全栽培の取り組みを伝えて、百貨店・高級フルーツ店・ギフト業者への販路を開拓し、経営を順調に拡大している。

### 海の見える丘で栽培

白岩さん兄弟は果樹農家の4代目。日本海を望む丘陵地に拓かれた国営農地で、両親の恒美さん（64）・すみゑさん（60）とともに、特産のナシ（3ha）やブドウ（1ha）、メロン（20a）、スイカ（10a）などを栽培している。

ナシは「ゴールド二十世紀」「豊水」「新興」「王秋」、ブドウは「藤稔」「ピオーネ」「ロザリオロツソ/ピアンゴ」「シャインマスカット」「オリエンタルスター」などを生産。メロンは「キューピットメロン」、スイカは楕円形小玉の「姫まくら」と、多彩で個性的な品目を手がける。

昨年9月には国道178号沿いに直売所を開設。「うみのみえる丘 白岩恒美農園」がキャッチフレーズだ。

### 積極的な営業で販売先を拡大

兄の千尋さんは4年前、父の恒美さんの入院をきっかけに30歳で脱サラし、京都市からUターン。前職



人気の新品種「オリエンタルスター」（糖度20）が順調に育つ

(和小物・雑貨の営業)の経験を生かし、「どうすれば売れるかではなく、相手は何を望んでいるのか」という顧客目線に立って、百貨店や高級フルーツ店、郵便局、カタログギフト業者などの販路を次々と開拓してきた。

取引先との商談では、「なぜおいしいか」をどれだけ語れるかが勝負」という。

BtoB(企業間取引)が千尋さんの担当なら、BtoC(小売り)は母のすみゑさんが担う。祖母(姑)の代からの行商を受け継ぎ、7月~12月にかけて週3日、軽バンにナシやブドウなどを積んで、丹後半島一円のお得意さんを回る。「今度はいつ?」と心待ちにしているなじみ客も多い。

## 自らの強みは畑の中にある

一足早く就農していた弟の雅人さんは、健康を取り戻した父とともに生産を支える。

同農園は2010年に“自慢の梨”で府知事賞を受賞。父の経験に加えて、雅人さんは「安全性にこだわった



丹後国営開発の浦明団地で高品種の果樹栽培にこだわる

い」と土壤診断を毎年行って減農薬に取り組み、さらに竹粉やカニ殻などを用いた独自の肥培管理を行うことにより、果実のつやと糖度の向上を図っている。

「よそにない白岩農園の強みは畑の中にある」と、兄弟で協力して、ブドウは垣根づくりと雨よけを組み合わせたレインカット方式で栽培。低樹高で太陽光がよく当たるように仕立て、窒素を抑えて栽培することで、高糖度で色艶のよいブドウを生産している。

## 規模拡大で法人化めざす

兄弟が就農する前に比べて、経営面積は約2倍に増え、売上げもアップした。

千尋さんは、千葉・幕張メッセから沖縄まで展示会・商談会を飛び回るほか、昨年から京都府海外経済課とともに海外輸出にも挑戦している。昨年は、香港とシンガポールにナシを、台湾に委託加工した梨ジャムを輸出した。

また、地元の旅館と提携して、「フルーツを料理する」という新発想でカニなど海の幸とのコラボ料理を提供する企画や、宿泊客限定の農業体験を企画するなど、これからのアイデアは尽きない。

千尋さんの企画・営業力と雅人さんの栽培技術をマッチングすることで、「いまの多品種栽培を維持しつつ経営面積を10ha規模に拡大し、さらに経営を法人化して飛躍したい」と、兄弟の夢は広がる。



昨年9月にオープンした直売所

# そば復活で地域を元気に —合言葉は 「あなたも儲ける、私も儲ける」—

代表取締役の中島俊則さん



## 有限会社 やくの農業振興団

福知山市

- 代表取締役 中島俊則  
取締役 荻野功治  
取締役 足立敏秀  
非常勤取締役2名 監査役2名
- 設立年月 1998年4月
- 資本金 2,195万円  
(出資者：行政1、取引業者2、個人13名)
- 労働力 13名  
(上記役員3名、職員10名)
- 事業内容 農産物(ソバ)の生産・加工・販売、農作業の受託、体験農園の管理運営、地域の美化・環境保全、墓地の管理など

### 農家・農村の応援団

(有) やくの農業振興団は農家の高齢化や後継者不足の危機感から、1998年、旧夜久野町と農家の共同出資による第3セクターとして設立された。農産物の生産・加工・販売から農作業の受託、体験農園の管理運営、草刈りや樹木の伐採、農機具の修理、墓地の掃除まで、住民から要望があれば何でも引き受ける。

「いってみれば、農家・農村の“応援団”です」と代表取締役の中島俊則さん(71)。農家に生産を委託

した農作物は市場より高値で買い入れ、販売に奔走する。「現状を守るだけでなく、“あなた(農家)も儲ける、私(会社)も儲ける”というWin-Winの関係が大事」と訴え、独自のアイデアで法人をけん引してきた。



農産加工場の指定管理者となり、そば粉は自社で製粉している

## 放棄地を再生、ソバ栽培広げる

「そば」復活の取り組みが本格化したのは2008年。40年ほど前まで夜久野高原一帯でソバが栽培され、国道沿いのドライブインでは「夜久野そば」が看板メニューになっていた。その“名物”復活を地域おこしにつなげようと、振興団と農家有志で「そばGの会」を組織。「G」と名付けたのは、グループのGと「地域にジイ（爺）が多い」という意味も込められているという。

振興団が中心となって、ソバ用の播種機やコンバインを導入し、周囲の農家にも栽培を呼びかけた結果、初年度（2009年度）は自社農場4.5ha、協力農家（20戸）2.5ha、計7haでソバを栽培。農家が栽培したソバも、振興団がすべてコンバインで収穫し、同社が指定管理者となっている農産加工場（旧大江町）で自社製粉、製麺は農商工連携で隣接する兵庫県朝来市の製麺会社に委託することにより、生産・製粉・製麺・販売の一貫体制を整えた。

その後、上夜久野の本社から30km以上も離れた福知山市中六人部（田野山田地区）の耕作放棄地約5haを再生利用するなど、夜久野町以外でもソバ栽培を開始。2014年度のソバ作付面積は、自社農場12ha（うち夜久野以外の福知山市域で5ha）、協力農家（60戸）23ha（同13ha）、計35haに拡大している。

## 「京蕎麦 丹波ノ霧」を主力に

そばは、そば粉6・小麦粉（つなぎ）4の割合で、「そ

主力商品「そば宝」と「丹波ノ霧」



振興団の役員と若いスタッフの面々

ば宝（だから）」(商標登録済み)と命名し、2011年、福知山観光協会の推奨土産品に認定。2014年には、京都学園大学との連携プロジェクトで麺にソバ殻を散りばめた最上級ブランド「京蕎麦 丹波ノ霧」を商品化した。

まずは地元で広く知ってもらおうと、市内で「そば祭り」を毎年開催するほか、大阪や東京での全国イベントにも出品し、人気を集めている。販路は地元のスーパー、飲食店だけでなく、京阪神、首都圏にも広がっており、産直ギフト用に商品登録の引き合いも多いという。

2013年度の法人の総収入は約5,000万円（農外収入、各種助成金を含む）で、うち「そば」は1,800万円。当面の目標2,000万円も達成間近だ。

## 農家とともに地域おこし

これまでに商品化したのは麺だけにとどまらない。深煎り焙煎したそば茶、そばと混ぜご飯をセットにした「村の食事」(冷凍) シリーズ、さらにそば粉を使ったパンケーキなどスイーツ類の開発も進めている。

「農商工連携や6次産業化による地域おこしは、農家の参加があつてこそ」と中島さん。農家の所得を増やし、農業・農村を元気にするため、京阪神や東京での営業活動から地元集落の活性化事業まで奔走する。

来年から、原材料の小麦（強力粉用の品種）も福知山市内で生産する取り組みを開始する。水田フル活用のモデルケースとして、福知山市全域で農業振興に奮闘する振興団の挑戦に期待が高まっている。

# 農地中間管理事業に330経営体が応募

— 規模拡大めざす担い手から期待の声 —

農地を面的にまとめて農業経営の規模拡大を応援する「農地中間管理事業」がスタート。今年度の事業に応募した農地借受希望者の状況が公表されました。

京都府農地中間管理機構（京都府農業総合支援センター）によると、府内23市町村で行われた公募（第1回＝8～9月、第2回＝10～11月）に応募した農地借受希望者は延べ750経営体（個人・法人）で、市町村が設定した69の区域ごとに、延べ750経営体（2,254ha）の借受希望がまとまりました。

複数の区域で借受を希望している応募者の重複分（420経営体、1,083ha）を除くと、実数では330経営体（1,171ha）となる見込みです。

認定農業者や集落営農法人など地域内の経営体が全体の8割超を占めていますが、イオンアグリ創造（株）、こと京都（株）、（株）フルーツガーリック、（株）ジェイエイヤましろファームなどの地域外参入者や新規参入者も延べ141経営体に応募。今後、担い手の希望に応じて、市町村ごとにまとまった貸出希望農地の掘り起こしとマッチングが求められています。

なお、次回の農地借受希望者の公募については、平成27年7月頃に行われる予定です。

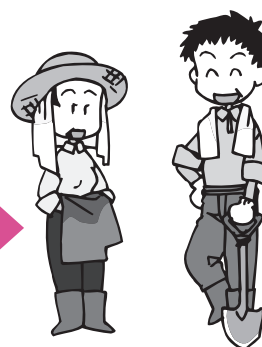
農地中間管理事業の詳細については、京都府農業総合支援センター（TEL. 075-417-6847）または市町村農林担当課にお問い合わせください。

※借受希望者の氏名、面積はホームページで公表しています <http://agr-k.or.jp/kyoto-j/farmlbank/>



- ・農地を貸したい
- ・経営を縮小したい

京都府農業  
総合支援センター  
(京都府農地中間管理機構)



- ・農地を借りたい
- ・新規就農したい
- ・農地を1カ所にまとめたい

農地中間管理事業は、地域ぐるみで話し合っまとめた農地を、農地中間管理機構（京都府農業総合支援センター）が受け皿となって借り受け、公募で選ばれた担い手に貸し付ける事業です。

## ● 「京力農場づくり推進大会」で経営の展望を拓こう！ ●

平成26年度の「京都府京力農場づくり推進大会」が、平成27年1月19日（月）、亀岡市（ガレリアかめおか）で開催されます。

今回のメイン講師は、長野県上伊那郡飯島町の（株）田切農産・紫芝勉社長です。中山間地域で経営資源と人材をフル活用し、直売所グループや農産加工グループ、草刈りなどの農作業グループが元気に活躍するユ

ニークな農業経営を展開していることで、全国的に注目を集めています。

このほか、府内の先進的な農業経営の事例発表をもとに意見交換する分科会も行われます。

参加を希望される方は、市町村農林担当課を通じてお申込みください。

# 経営セミナー



今回のアドバイザー 中小企業診断士 山脇康彦さん

## 明日の農業経営のために備える

### ■伝統産業の衰退と革新

伝統産業の衰退が言われて久しい。若者の中には、職人の仕事に魅力を感じて門をたたく者もいるが、「売れない」「産業として成り立たない」という厳しい現実がある。衰退の要因は、生活者のライフスタイルの変化もあるが、最大の原因は「伝統的工芸品の産業の振興に関する法律」が、あまりにも伝統（文化）を「守る」ことに主眼を置き、ビジネスとして革新することに否定的であったことにある。

そうした中で、試行錯誤を重ねながら世界に向かって羽ばたこうとしている若者がいることは一筋の光明である。新しい市場を創造するとか、新しい技術や製造法などを取り入れることで「生き残れる可能性」が生まれるのである。

### ■差別化、オンリーワンをめざす

従来型の農業には、水耕栽培の脅威が迫っている。安心・安全、土地の条件を問わない、力仕事や熟練技術が不要、生産性が高いなど多くのメリットを有している。その反面、今のところ生産できる種類が少ない、建設コストが高く、野菜類の店頭価格が高いことなどから、「水耕栽培、恐るるに足らず」といった声も聞かれる。

しかし、幼小児を預かる団体などを中心に、安心・安全ニーズを満たしてくれる「水耕栽培の野菜」を購入するお客が今以上に増えるであろう。さらに、世界に目を向ければ、砂漠地帯や土壤汚染地域では、水耕栽培が歓迎されている。農業の土俵は、日本国内だけでなく世界中にある。プラントの大量輸出は大量生産を可能にし、建設コストは数年の内に大幅に下がるであろう。

台風が来てから慌てても遅い。どう準備するか。基

本は差別化、オンリーワンである。

露地栽培にあって水耕栽培に無いものは何か？ それは豊かな大地、清浄な水、寒冷な空気、降り注ぐ太陽など、コメ作りの物語である。物語を語り継ごう。

また、田畑は元々、人々に働く場を提供し、生活の糧を得る場を提供し、社会的に有用な物資を生産・提供してきた。その意味で、田畑は現代企業の生みの親といえる。そのことにもっと誇りを持つよう。

### ■視野を広げて“楽しい農業”を

仲間と一緒に楽しい農業をしよう。そのためには、まず、自分たちが楽しむことである。そうすれば夢も広がる。その賑わいを見て、感じて若者が集まる。裾野も広がる。

広い視点で経営革新を考えよう。売り物は農産物だけではない。農業技術や知識、これまで培ってきたネットワークも売り物である。海外にも目を向けよう。

ところで筆者は今、脳梗塞を患っている。生活習慣病（不摂生と運動不足など）の上に、健康診断をさぼっていたことが原因である。幸いにも、早期発見、早期治療で事なきを得た。今では普通の日常生活を送っている。

個人事業であれ、法人であれ、年に一度は経営の健康診断を受けよう。“経営習慣病”は生活習慣病に勝るとも劣らぬ恐ろしい病である。知らない間に進行し、気がついたら手遅れになっている。何事も早期発見、早期治療が肝要である。

事業継承の課題を早期に発見し、必要な手を打つことで“円滑な経営承継”が可能となる。

農業経営について気軽に相談できるパートナーとして、スペシャリストの中小企業診断士を役立てていただきたい。

# 農業 法人

# ニュース

## — 京都府農業法人経営者会議の取り組み —

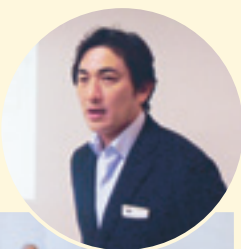
### ■(株)六星、(株)ぶどうの木を視察

京都府農業法人経営者会議（山田敏之会長）は、12月11日、先進的な農業法人の経営事例を学ぶため、石川県白山市・(株)六星と金沢市・(株)ぶどうの木で「農業法人の経営見学会inいしかわ」を開催しました。

今回の見学会は、府農業会議との共催により、「農業法人と意欲ある農業者の交流会」として開催し、府内の農業法人と法人化志向農業者が40名余り参加。(株)六星・軽部英俊社長と(株)ぶどうの木・本康長社長の話から、“ヒットする商品・サービスを生み出す仕組み”や、“若いスタッフを育てる仕組み”について学びました。

(株)六星の軽部社長▶

▼活発な質疑で経営のヒントをつかんだ参加者



### ■ファーマーズ&キッズフェスタに出展



経営者会議役員を中心に京都の農業法人を紹介

京都府農業法人経営者会議は、11月8～9日、東京・日比谷公園で開かれた「ファーマーズ&キッズフェスタ」に出展し、府内の農業法人のPRを行いました。

今年のフェスタは、日本農業法人協会の設立15周年記念イベントとして開催されたため、前日からの「全国農業法人秋季大会in関東」と併せて、全国各地の農業法人が集いました。

府内からは8社が参加し、2つのブースで商品説明や事業内容の紹介を行って、全国の農業法人との交流を深めました。

### 編集局から

- ◆本号で紹介した白岩千尋さんと(有)やくの農業振興団・中島俊則社長は、いずれも営業活動で全国各地を飛び回っています。
- ◆白岩さんは、梨の輸出拡大に向けて、阪神港での積み込みや通関のパートナーと組んで、海外の取引先と直接契約を広

げています。一方の中島社長も、全国で、有名な蕎麦店や通販業者に人脈を広げています。

- ◆本誌は、次号でも“新たな農業ビジネス”に挑戦する経営者を紹介します。お楽しみに！

発行/2014年12月

発行者 京都府農業会議 (京都府担い手育成総合支援協議会事務局)

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 京都府庁西別館内 TEL.075 (441) 3660代